



# 陸游「釵頭鳳」詞をめぐる

森 博 行

## 序文

私は「詞における構成一章莊「謁金門」詞試釈」（『大谷女子大國文 第27号』）と題する拙論において、歐陽脩の詞「踏莎行」とともに、陸游の詞「釵頭鳳」（『渭南文集』卷四十九および『中興以來絶妙詞選』卷二）

紅酥手

紅酥の手

黄滕酒

黄滕の酒

滿城春色宮牆柳

滿城の春色  
宮牆の柳

東風惡

東風 惡し

欲情薄

欲情 薄し

一懷愁緒

一懷の愁緒

幾年離索

幾年の離索

錯錯錯<sup>△</sup> 錯 錯 錯

(以上、前闕)

春如旧<sup>●</sup> 春は旧の如し

人空瘦<sup>●</sup> 人は空しく瘦せたり

淚痕紅涴鮫綃透<sup>●</sup> 淚痕 紅く鮫綃を涴らして透る

桃花落<sup>△</sup> 桃花 落つ

閑池閣<sup>△</sup> 閑かなる池閣

山盟雖在 山盟 在りと雖も

錦書難託<sup>△</sup> 錦書は託し難し

莫莫莫<sup>△</sup> 莫 莫 莫

(以上、後闕)

を取りあげて、この作品は、前闕と後闕で男女が入れ替わり、前闕は男の立場にたって、後闕は女の立場にたって、それぞれ表現されていると指摘した。ところが前稿では紙幅の関係で言及することができなかったが、陸詞に対する私のような解釈は、実は現代の専門家の間ではほとんど見られないのである。そこでこの場を借りて陸游の「釵頭鳳」詞を中心に、詞における構成という点に関して若干の補足をすることにした。

一

前稿において述べたとおり、陸游の「釵頭鳳」詞は前闕は男、後闕は女の立場から表現されているというのが私の

見解であるが、現今の専門家の解釈では、後関も男（陸游）の立場から、女（陸游の離縁した元の妻・唐氏）を思つて表現したとするのが圧倒的に多い。私が参照した資料は、たまたま私の手元にあったわずかな資料

- 1、游国恩 李易選注『陸游詩選』二五四頁以下（人民文学出版社 一九五七年三月）
- 2、唐圭璋 主編『唐宋詞鑑賞辭典』八〇五頁以下（江蘇古籍出版社 一九八六年十二月）
- 3、唐圭璋 繆鉞 叶嘉瑩 周汝昌 宛敏瀛 万云駿等撰『唐宋詞鑑賞辭典 南宋・遼・金』一三七四頁以下（上海辭書出版社 一九八八年八月）

- 4、潘百齊 主編『全宋詞精華分類鑑賞集成』六八〇頁以下（河海大学出版社 一九九一年十二月）
- 5、喻朝剛 周航『分類新編兩宋絕妙好詞』七六七頁以下（吉林文史出版社 一九九二年二月）
- 6、陳緒万 李德身 主編『唐宋元小令鑑賞辭典』五六三頁以下（陝西人民出版社 一九九二年七月）
- 7、錢伯城 主編『中國詩歌叢書 唐宋詞選』一四三頁以下（上海書店出版社 一九九三年八月）
- 8、陸國斌 鍾振振 主編『歷代小令詞精華』三六六頁以下（岳麓書社 一九九三年十月）
- 9、王仲厚『唐宋詞話』二四六頁以下（黑龍江教育出版社 一九九四年十月）
- 10、蕭延恕著『宋詞風流佳話』二四八頁以下（岳麓書社 一九九五年五月）

や、後引する数点の資料にすぎないが、これら専門家に共通するものは、総じていえば、

- (一)、この詞に歌われている女性は、陸游の離縁した元の妻・唐氏である

と云うことであり、この前提のもとで、ひとつは

- (二)、後関は陸游が唐氏を想像した表現である（相手の立場になり替わって表現したのではない）

もうひとつは、この詞を解く重要なキー・ワードであるが、

- (三)、後関の「錦書」は、陸游が唐氏に送る書信である

と解釈されるのである。ここに典型的な例証として、二番目にあげた『唐宋詞鑑賞辭典』に収められている楊傑氏の後関に対する解釈を紹介しよう。

(過片) 不写自己的淚、而写對方的淚、含憐香惜玉之意。以下筆鋒一轉、写詞人透過淚眼相看、剛才的滿城春色忽然變成一片花落人稀、蕭條淒苦的景象。桃花飄落、池閣閑置、給人以人世飄零、鳳去樓空之感、進一步烘托詞人悲苦無告的心境。離愁雖苦、總還有重逢的希望；死別雖哀、却也可對亡靈盡訴衷腸、而這裏写的是生離死別之外的一段。原本是舉案齊眉、如今却咫尺天涯、連錦書也無法托寄、這是多麼殘酷的現實、怎不令詞人斷統哽咽、肝腸寸斷！(後関に己の淚を記さず、相手の淚を記して、佳人を哀れむ気持ちを表したのである。以下、筆先は一轉し、詞人の淚の眼を通して見れば、先程の町中の春景色も、たちまち花散り人はまれに、蕭條たるもの寂しい光景に一変する。ハラハラと散る桃の花、ひっそりとした池のそばの高殿は、人の世のはかなさ、鳳は去り樓は空しの思いを人に与え、更には詞人の告げようのない悲しみを浮かびあがらせている。生別の愁いは苦しいけれども、いつかは再びめぐりあう希望がある。死に別れば哀しいけれども、亡き人に対して心の中を訴えることができる。しかし、ここに記されているものは、生き別れや死に別れを越えた感情である。もとは恭々しくつかえていた妻。今では二人の間のわずかの隔たりも天涯、手紙すら托しようがない。何という残酷な現実、せきあえぬ嗚咽、切り刻まれる腸。)

右のような解釈は、中国の学者にとどまらない。

11、波多野太郎著『宋詞評釋』(櫻楓社 昭和四十六年)

波多野氏は「釵頭鳳」後関の「桃花 落つ、閑かなる池閣、山盟 在りと雖も、錦書は託し難し」に対して、次のように解釈された(一一八頁)。

夫のいない若く美しい女性の生活を象徴するように、春は空しく老いて、桃の花散り池や建物ひっそりとして

いる。變らじと互いに愛情を結んだ仲なのに、彼女は別れて今は再婚しているので、慕情をしたためた文を出すわけにもいかない。

波多野氏も右の訳文から判断して、先程紹介した中国の学者と同じように、後闕も陸游の立場から表現されたものとし、また「錦書」を陸游の書いた手紙とされているようだが、ここで結論的に言えば「錦書」は言うまでもなく【晋書】卷九十六「列女伝」に記述されている竇滔の妻・蘇惠の故事「竇滔の妻蘇氏、始平の人なり。名は惠、字は若蘭。善く文を属る。滔、符堅の時、秦州の刺史為りしが、流沙に徙さる。蘇氏は之れを思い、錦を織りて迴文旋図詩を為りて以て滔に贈る。宛転循環して之れを読めば、詞は甚だ悽惋なり。凡そ八百四十字なり」にもとづくものであるから、女性の書いた手紙でなければならない。また女性は妻にかぎらない。次に引用するのは、五代・歐陽炯（？—九七一）の「鳳樓春」（『花間集』卷七）である。

鳳髻綠雲叢。

鳳髻 綠雲叢り

深掩房櫺。

深く房櫺を掩う

錦書通。

錦書通じ

夢中相見覺來慵。

夢中に相見み 覚め來たりて慵し

勻面淚

勻面の涙

臉珠融。

臉珠融けり

因想玉郎何処

因りて想う 玉郎 何れの処にか去りし

对淑景誰同。

淑景に対して誰と同にせん

（以上、前闕）

小楼中。

小楼の中

春思無窮。

春思 窮り無し

倚欄顚望

欄に倚り 顚望すれば

闌牽愁緒

闌かに愁緒を牽き

柳花飛起東風。

柳花飛び 東風起こる

斜日照簾

斜日 簾を照らし

羅幌香冷粉屏空。

羅幌 香冷く 粉屏空し

海棠零落

海棠 零落し

鶯語殘紅。

鶯 殘紅に語る

(以上、後闕)

この詞にうたわれている女性は、行方も知れず去ってしまった「玉郎」(男子の美称)を夢にまで思う「小楼中」の妓女の類である。したがって「錦書は託し難し」を陸游の歎きと取るのは無理な解釈であるのみならず、相手の女性が唐氏でなければならぬ根拠もないわけである。更にまた

12、村上哲見著『宋詞』一五七頁以下(筑摩書房 昭和四十八年)

において

ここの二句(「山盟」の二句一引用者)、あのとときの誓いは決して忘れていない、心変わりをしたわけでないが、その思いを伝えようがないの意。

と解釈されたのも、波多野太郎氏と同じ見解であろう。

以上、陸游の「釵頭鳳」に対する専門諸家の解釈を紹介したが、確認のために2を除いた文献の解釈を要点のみ引用し、簡単なコメントをつけ加えておく。

1、「錦書句」謂唐氏既已改嫁、自不便再寄書函以通情好。「莫莫莫」勸彼此莫為旧情所牽掛。

「莫莫莫」についての解釈から考えて、「再び書函を寄せる」のは、陸游の方だと思われる。

3、下面又転入直接賦情…「山盟雖在、錦書難托。」這兩句雖只寥寥八字、却裏從千回万転中来。雖說自己情如山石、永永如斯、但是、這樣一片赤誠的心意、又如何表達呢？

1と同様、「錦書」を陸游の手紙とされ、後半も陸游の立場からうたったとされる。

4、如今、「山盟雖在」、兩人又近在咫尺、却連錦書都無法捎寄、這是一種生離死別之外的情懷、令人肝腸寸斷。作者欲訴不能、欲休不忍。

これも1と同じである。

5、過片三句、寫邂逅重逢、伊人消瘦的身影和憔悴的形容与当年的形象鮮明对照。

「伊人」は唐氏を指す。また同書七六九頁に唐氏が唱和したとされる作品（後述）を載せ、「本篇与陸游原作分別從男女双方、反映了這一愛情悲劇（以下省略）」と説明されている。

6、心上雖然記着当年和她的山盟海誓、可是書信難寄。

やはり1と同じ。

7、如今二人重又相会、但已「物是人非」、所以愁腸大動、相對淚下、以至于濕透了系綢手絹。作者這裡主要形容唐氏、所以說「淚痕紅綃」、以花上的紅露來比喻佳人的眼淚…但作者寄情至深、其美双方的感受是一樣。

「桃花落、閑池閣」、由于作者情傷之至、乃至于恍惚間感到桃花已落、春光已去、滿城的池閣之旁變得冷冷清清、游人頓失。

こういう解釈が生まれるのは、後闕も陸游の立場から歌ったと考えるからである。

8、換頭處、從「幾年離索」句生發、想像对方相思之凄苦、以致血淚沾巾…「淚痕紅涴蛟綃透」。



これは、後闕を陸游が想像したという解釈である。

9、下闕從唐婉角度着眼。又由「瘦」字設想唐婉素日必「淚痕紅涴鮫綃透」、是体贴之詞、聯想自然、更顯深情。

これも想像説である。なお、唐婉は唐氏のことである。

10、【訳文】往昔海誓山盟雖還在、可伝達我心意的書信無人托。

やはり1と同じである。

更に、以上の外に

13、兪平伯『唐宋詞選釈』一八一頁以下（人民文学出版社 一九七九年）

14、李長路 賀乃賢、張巨才『全宋詞選釈』三七六頁（北京出版社 一九九四年十月）

15、喻朝剛 周航 主編『全宋詞精華』③ 一四二頁以下（遼寧古籍出版社 一九九五年六月）

の三著を参照したが、15は9と同じ。14には特に明瞭な説明はない。また13にも特に指摘がないのは、この著書に歐陽脩の「踏莎行」（前稿に取りあげた）に対して、「上片征人、下片思婦」（七九頁）という注釈があることから考えて、陸游の作品に対しては前後で男女が入れ替わるということは意識していなかったと思われる。私と見解を同じくする学者はいないのだろうか。

二

私は陸游の「釵頭鳳」詞の後闕は、女性の立場にたって表現されているといったが、それは後闕だけを取り出して言えば、女性が描写されているということにほかならない。この点に関してここでふたつの点について指摘しておく

たい。

その一。陸游は女性を表現するすぐれた詞的才能をもっており、それは『花間集』の詞風に通じるものである。その証拠は、『中興以来絶妙詞選』（卷二）に収録されている『月照梨花』（詞調は「河伝」のヴァリエーションのひとつ）と題する詞である（『渭南文集』には収めず）。

悶已繁損。

悶え已に繁い損い

那堪多病。

那ぞ多病に堪えん

幾曲屏山

幾曲の屏山

伴人昼静。

人に伴いて昼は静かなり

梁燕催起猶慵。

梁燕 起きるを催すも 猶お慵し

換薰籠。

薰籠を換うるに

（以上、前闕）

新愁旧恨何時尽。

新愁 旧恨 何れの時にか尽きん

渐凋绿鬢。

渐く緑鬢を凋う

小雨知花信。

小雨 花信を知る

芳笺寄与何処

芳箋 何れの処にか寄与せん

繡閣珠櫺。

繡閣の珠櫺

柳陰中。

柳陰の中

（以上、後闕）

この詞は、副題に「閨思」とあり、一読して明らかのように孤独な女性の倦怠を描いた作品である。この作品を

『花間集』の中から孫光憲の「河伝四首・其三」（卷九）と比較してみよう。

花落  
花落つ

煙薄  
煙薄し

謝家池閣  
謝家の池閣

寂寞春深  
寂寞として春深し

翠娥輕斂意沈吟  
翠娥輕く斂め 意に沈吟す

沾襟  
襟を沾す

無人知此心  
人の此の心を知る無し

（以上、前闕）

玉鐘香断霜灰冷  
玉鐘 香断ち 霜灰冷し

簾鋪影  
簾は影を鋪く

梁燕帰紅杏  
梁燕は紅杏に帰る

晚来天  
晚來の天

空悄然  
空しく悄然たり

孤眠  
孤り眠る

枕檀雲髻偏  
枕檀に雲髻偏く

（以上、後闕）

孫光憲の作品が建物の外の風景から移動して建物の中の女性へという描写であるのに対して、陸游の場合、逆に内部から移動して最後に外部へという構成であること、及び陸游の作品は時刻が眠りから覚めても、まだ起きる気にな

れないという昼間であるのに対して、孫光憲の作品はひとり眠りにつこうとする晩方であることなどの違いがあるが、このような対照的な相違はむしろ陸游が右の作品を作るにあたって、孫光憲のこの作品を意識していたということと思わせるものである。いずれにしても陸游も『花間集』以来の閨怨という伝統的なテーマをよく心得ていて、彼自身もそのような作品を作っているのである。なお補足すれば、陸游の作品は、前闕の「損」(戈載『詞林正韻』第六部の上声)・「病」(第十一部の去声)・「静」(第十一部の上声)、と後闕の「尽」(第六部の上声)・「鬢」(第六部の去声)・「信」(第六部の去声)の字が押韻する。詞には『詞林正韻』の第六部と第十一部のみならず、他の異部の間でも通押する例があることは、詹安泰著「論填詞可不必嚴守声韻」(『詞学研究論文集』所収 上海古籍出版社 一九八八年。原載『文史雜誌』五卷一・二期合刊一九四五年一月)に指摘されており、王力著『漢語詩律學』(上海教育出版社 一九七九年十一月新2版)五五二頁以下に詳しい。この点に関して王力氏は、「直到現在、北方官話還能保存ㄅ・ㄆ的分別。不過、詞人既可純任天籟、就不免為方音所影響、當時有些方音確已分不清楚ㄅ・ㄆ的系統了、所以它們不能混用了」といわれた。ちなみに陸游の故郷・山陰(紹興市)の発音(呉音)には、普通語においてㄅとㄆの区別がある韻尾に対してまったく区別がなく、ともにㄅと発音されることはよく知られている(呉語内部の間における微妙な違いについては顔逸明著『吳語概説』(華東師範大学出版社 一九九四年)に詳しい)。また、後闕の「芳箋」の句、『欽定詞譜』(卷十一「河伝」の項)は「寄与」で切り、「何処」を次の句に続けるが、夏承焘呉熊和著『放翁詞編年箋注』一四二頁(上海古籍出版社 一九八一年)の句読に従った。

その二。陸游の詞の中に前半は作者、後半は作者の想像によって女性を描いた作品が確かにある。「水龍吟」(『渭南文集』卷四十九)と題する次の作品である。

樽前花底尋春処

樽前 花底 春処を尋ね

堪歎心情全減。

歎くに堪えたり 心情 全て減ずるを

一身萍寄

一身 萍の寄するがごとく

酒徒雲散

酒徒 雲散し

佳人天遠

佳人 天のごとく遠し

那更今年

那ぞ更に今年

瘴煙蛮雨

瘴煙 蛮雨

夜郎江畔

夜郎の江畔なるをや

漫倚樓橫笛

漫りに樓に倚り 笛を横たえ

臨窓看鏡

窓に臨み 鏡を看

時揮涕

時に涕を揮い

驚流転

流転に驚く

(以上、前闕)

花落月明庭院

花落ち 月は庭院に明かなり

悄無言 魂消腸断

悄として言無く 魂は消え 腸は断たる

恐肩携手

肩に恐り 手を携え

当时曾効

当時 曾て効う

画梁栖燕

画梁の栖燕に

見説新来

見く説らく 新来

網縈塵暗

網縈い 塵暗し

舞衫歌扇

舞衫と歌扇とに

料也羞憔悴

料う 也た憔悴するを羞じ

慵行芳徑

芳徑を行くに慵く

怕啼鶯見

啼鶯の見るを怕るるを

(以上、後関)

この詞は副題に「采南の作」とある。作者が采南つまり采州にいたのは、趙翼の『陸放翁年譜』(『甌北詞話』卷七)によれば、淳熙元年の冬から同二年の正月十日までの期間であり、この詞に歌われている季節は春(後関最後の一句の「鶯」)であるから、淳熙二年正月、五十一歳の時に作られたと推定される。詞の内容であるが、前関が作者自身のことを歌っているのに対して、後関は第三句の「肩に憑り 手を携え、当時 曾て効う、画梁の栖燕に」という表現から考えて、前関に歌われている「佳人」(おそらく陸游と深い仲であった妓女)を歌ったと思われる。「肩に憑る」とは弱い者が強い者に寄りかかる姿勢であり、「手を携える」のは愛し合うふたりの行動であり、「栖燕」は仲の良い男女の象徴である。この詞は彼女に贈ったものではないかと推測される。問題は後関第六句の「見説」(聞くところでは)と第九句の「料」(思うに)という表現である。「見説」といい「料」と表現されている以上、この詞の後関に相手の女性の心理や行動が歌われているとしても、それは風聞と作者の想像として表現されていることになる。しかし、ここで重要なことは、「見説」および「料」を取り去ってしまえば、女性を描写した作品として読むことも可能であると言ふことである。問題の「釵頭鳳」詞である。この詞の後関中の「錦書」はずでに指摘したとおり、一般的にいう女性に男性に書く手紙である。陸遊の場合も例外でない。念の為に陸遊の作品の中からも一例紹介しよう。

江頭日暮痛飲

江頭 日暮 痛飲す

乍雪晴猶凍

乍ち雪晴れて猶お凍たり

山駅凄凉

山駅 凄凉たり

灯昏人独寝。

灯昏く 人独り寝ぬ

(以上、前関)

鴛機新寄断錦。

鴛機 新に断錦を寄す

歎往事 不堪重省。

往事を歎き 重ねて省るに堪えず

夢破南楼

夢は南楼に破れ

緑雲堆一枕。

緑雲 一枕に堆し

(以上、後関)

これは、「清商怨」(『渭南文集』卷四十九)である。副題に「葭萌駅の作」とあり、『放翁詞編年箋注』(三三五頁)によれば、乾道八年(一一七二、四十八歳)、成都府安撫司參議官に任命されて、漢中から成都に行く途中、葭萌駅に泊まった時に作られた(この点については少し問題があり、いずれ改めて卑見を述べるつもりである)。後関の「鴛機 新に断錦を寄す」の「断錦」はおそらく断腸の思いを綴った錦書の意味であり、この錦書はかつて親しくしていた女性が陸遊に寄せた手紙であって、最後の二句はこの手紙を読んだ後、当時の情景を思い出したということであろう。湯華泉氏の説明によれば、「清商怨」詞の「南楼」は、この詞が作られたのと同じ年の寒食に近いころに作られた「蝶恋花 離小益作」(『渭南文集』卷四十九)の前関の最後の二句「千里斜陽鐘欲暝、憑高望断南楼信」の「南楼」と同じであるという(『唐宋詞鑑賞辞典 南宋・遼・元』一三七八頁)。陸游は錦書を待ち望んでいたのであり、彼に錦書を寄せた女性がいたと思われる。それはともかく「釵頭鳳」後関の中には先程の「水龍吟」のような特に男の立場でなければならぬ表現はまったく見当たらない。つまり女性が直接的に描写されているのである。

以上、右に述べたふたつの点から考えて、「釵頭鳳」後関は女の立場にたって表現されたという解釈を否定する積

極的な言語表現上の要素はまったくないと私は考える。なお蛇足ながらここまで書いて、「釵頭鳳」詞を含め本論に紹介した陸游の作品に登場する女性は同一人物であり、陸游はある一人の妓女を彼の故郷に連れて帰ったという周密『齊東野語』（巻十一）流の物語を想像してみたくなるが、残念ながら確かな証拠はない。

それはさておきくり返して言うが、「釵頭鳳」詞の後関は、女性の立場にたって表現されているというのが私の見解である。私と同じ立場に立つ学者はいないのでろうか。「徳は孤ならず。必ず隣有り」。実は私が参照した範囲ではわずか一人に過ぎないけれども、基本的に私と同じ考えの学者がいるのである。

16、李文祿 宋緒連 主編『古代愛情詩詞鑑賞辞典』八五九頁以下（遼寧大学出版社 一九九〇年七月）  
 の中に収録された陸游詞の解釈をされた李漢超氏である。李氏は次のように説明された。

這首詞分上下兩闕、上闕是男子口吻、自然是陸游在追叙今昔之異…昔日的歡情、有如強勁的東風把枝頭繁花一掃成空。別後數年心境索漠、滿懷愁緒未嘗稍積、而此恨既已鑄成。下闕改擬女子口吻、自然是寫唐氏泣訴別後相思之情…眼前風光依稀如旧、而人事已改。為思君消瘦憔悴、終日以淚洗面、任花開花落、已無意再臨池閣之勝。當年山盟海誓都成空願、雖欲托書通情、無奈碍于再嫁的处境、也只好猶夷而罷。此詞口吻之逼真、情感之摯婉、都不類擬想之作。如果没有生活原型作為依拠、只凭虛構是不会写得如此真切感人。以上談的是這首詞的總體印象、為了印証這一印象、還可以從語言意象入手做進一步的分析。（この詞は前後の兩闕に分かれる。前関は、男子の口吻であり、陸游が今と昔の変わりよう、つまり昔日の歡びも、強い東風が枝いっばいの花を一掃してしまうように、空しくなってしまったということを追叙している。別後の數年、心は索漠、胸いっばいの憂愁は少しも消えることはない、そしてこの恨となってしまう、事はもはややり返しがつかない。後関は、女子の口吻に改めてなぞらえ、唐氏の別後の恋情、つまり眼前の光景はまるで昔どおりなのに、人の世界は変わってしまった、ということ泣いて訴えているのである。君を思うがために身も痩せてやつれ、一日中、涙で顔を洗い、



花の開き花の散るのにまかせ、もはや再び池閣景勝の地に臨む気持ちはない。あの年の山のような盟い、海のような誓いもすべて空しい願ひとなりはて、手紙に託して心を通わせようとしたいけれど、再婚の身の上ではいかんともすべがなく、ただためらうばかりである。この詞の口吻の迫真、感情のまじめさとつつまじやかさは、模擬想像の作とは思われない。もし依拠する生活の原型がなく、ただ虚構によるだけならば、このような真に人を感動させるような表現はできるはずがないものである。以上に述べたことはこの詞の全体的な印象であり、この印象を実証するために、やはり言葉のイメージから着手してより深い分析をするのがいいであろう。) かくて李漢超氏は、引き続いてより深い分析と解説をされ、前半は陸游の口吻で、後半は唐氏の口吻で表現されたものであると、あらためて解釈されるのである。李氏の解釈のうち相手の女性を唐氏と断定する点を除いて、李氏の見解に対して私は完全に同意するものである。

## 三

陸游の「釵頭鳳」詞における女性が唐氏ではなくて、おそらく妓女であるという点については、前稿の中で呉熊和氏の見解を引用した上で、私の考えを述べておいた。ところで当時、詞人がお気に入り妓女や情人を詞に取りあげて歌う場合、詞人と妓女(情人)が前半と後半で入れ替わるという構成に作り上げるといのが、ひとつの表現方法になっていたということについても、前稿において漠然とではあるが指摘しておいた。ここに更に北宋の秦觀(字は少遊、一〇四九—一一〇〇)および南宋の姜夔(字は堯章、一一五五?—一二二一?)の作品を例証として、あらためて確認しておくことにしたい。なお、陸遊(字は務観)が秦觀(字は少遊)と命名の由来という不思議なえにして結ばれていることはよく知られている。陸游は詞の名手である秦觀にある種の親近感をいだいていたかもしれない。

まず秦観の詞「水龍吟 贈妓婁東玉」(『淮海長短句』卷上)である。

小楼連苑横空

小楼 苑に連なり 空に横たわり

下窺繡轂雕鞍驟

下に窺えば 繡轂 雕鞍 驟す

疎簾半捲

疎簾 半ば捲き

单衣初试

单衣 初めて試みる

清明時候

清明の時候

破暖輕風

破暖の輕風

弄晴微雨

弄晴の微雨

欲無還有

無からんと欲して還た有り

売花声過尽

売花の声は過ぎ尽き

斜陽院落

斜陽 院落

紅成陣 飛鴛聲

紅は陣と成り 鴛聲に飛ぶ

(以上、前闕)

玉珮丁東別後

玉珮 丁東たり 別れし後

悵佳期 參差難又

悵む 佳期 參差として又し難きを

名韁利鎖

名韁<sup>なづ</sup> 利鎖し

天還知道

天も還た知<sup>し</sup>道らば

和天也瘦

天和<sup>ま</sup>え也瘦<sup>も</sup>せん

花下重門

花下の重門

柳辺深巷

柳辺の深巷

不堪回首

回首するに堪えず

念多情 但有当時皓月

念う 多情 但だ有り当時の皓月

向人依旧

人に向かいて依旧たる

(以上、後闕)

副題の「妓婁東玉」は、秦觀と親密な仲であった蔡州の妓女・婁婉（字は東玉）である（増修箋註妙選群英草堂詩余）後集卷下所引の曾慥「高齋詩話」。言葉のひとつひとつの詳細な説明は省略するが、前闕は、「小楼」（妓楼）の上から、花売りの声も聞こえなくなり、日が西に傾くころになるまで、いつまでも作者を見送る妓女・婁婉、後闕は、俗世の「名利」のために、後ろ髪を引かれながら旅立っていく作者という構成になっている。

次に姜夔の「浣溪紗六首・其三」（白石道人歌曲）卷二。

釵燕籠雲晚不忺

釵燕 籠雲 晩に忺おぼわず

擬將裙帶繫郎船

裙帶を將つって郎船を繫ひがんと擬す

別離滋味又今年

別離の滋味 又た今年

(以上、前闕)

楊柳夜寒猶自舞

楊柳 夜寒くして 猶お自ら舞い

鴛鴦風急不成眠

鴛鴦 風急にして 眠りを成さず

些兒閑事莫繁牽

些兒の閑事 繁牽せらるる莫かれ

(以上、後闕)

この詞の前闕第一句の「忺」は、「意の欲する所」（洪武正韻）卷六「平声下二十二塩」という意味であり、男が

出て行くのを女（「籠雲」は女性の髪をいう）は「忤わず」というところである。第三句の「又た今年」は、以前にも同様の別離の体験があったのであろう。この詞には「辛亥（一九二二年）正月二十四日、合肥を発す」という副題があり、ここに歌われている女は、合肥で親しくなった情人とされている。夏承燾著『姜白石繫年』附録「白石懷人詞考」（『唐宋詞人年譜』所収）参照。夏氏の同書によれば、制作年未詳の「解連環」詞（卷三）が「似初別時作」。この「解連環」詞後闕の一段に

問後約 空指薔薇 後約を問えば 空しく薔薇を指すも

算如此溪山 算えば此の如き溪山

甚時重至 甚れの時にか重ねて至らん

と歌われている。「浣溪紗」にもとって、後闕の

楊柳 夜寒くして 猶お自ら舞い

鴛鴦 風急にして 眠りを成さず

は、出発を前にした眼前の実景であると同時に、悲しみに揺れ動き躊躇する作者の心象風景である。

## 結語

以上、宋代の著名なふたりの詞人である秦觀と姜夔の詞の中に、妓女や情人との別離を歌って作者と彼女たちとの間でかけ合いのような構成になっている作品があることを思えば、陸游の「釵頭鳳」が同様の構成になっていることに不思議はない。もっとも、陸游の場合は、別離後「幾年」を経ての「愁緒」を歌ったものであるが。

なお余談ながら、おそらく後の好事家が勝手に作り上げたのであろう、陸游の作品に対して唐氏が答えたという唱

和詞

世情薄

人情惡

雨送黄昏花易落

曉風乾

淚痕殘

欲箋心事

獨語斜欄

難難難

(以上、前闕)

人成各

今非昨

病魂嘗似秋千索

角聲寒

夜闌珊

怕人尋問

咽淚裝欲

瞞瞞

(以上、後闕)

世情薄し

人情惡し

雨は黄昏に送り 花は落ち易し

曉風乾く

淚痕残す

心事を箋せんと欲し

獨語して 欄に斜めなり

難 難 難

人 各を成す

今は昨に非ず

病魂 常に秋千の索に似たり

角聲寒し

夜は闌珊たり

人の尋問せんことを怕れ

咽涙して欲びを装う

瞞 瞞 瞞

が伝わっており、しかもこの後いくばくもなく、唐氏は怨みを含んで死んだという結末である。「御選歴代詩余」巻一百十八「穹娥齋主人」。愛する男女が生木を裂くように引き裂かれるとき、女性の死によってふたりの愛は完結するという方式は、それほど珍しい話ではない。だが、これはあくまでも男の願望であって、そうそう男に都合よく結末を迎えることなど現実にはありませんまい。陸游自身にしてみれば「釵頭鳳」詞において、すでに彼の文学的愛の世界は完結しているわけであるから、唐氏の作なるものはまったく無用の長物のはずであり、陸游が「釵頭鳳」詞を作った理由について、唐氏とはまったく別に現実的な根拠があったことは、第三節の冒頭で述べた通り、拙論「詞における構成—韋莊「謁金門」詞試釈—」の中で指摘しておいた。

### 注釈

①、この詞の押韻はややこしい。万樹「詞律」(巻十六)に引用されている別の陸游作「水龍吟」の例や、他の詞人の同題の作品に照らし合わせて、前闕第四句、後闕第七句は本来押韻しないが、第七部と第十四部は通押するから、右の場合前闕第四句「散」(第七部仄声)および後闕第七句「暗」(第十四部仄声)も押韻することになる。あるいはこの詞の場合、第七部のみの押韻なのであろうか。そうすると後闕の第七句「暗」は押韻しないことになるが、前闕の第二句「減」(第十四部仄声)が押韻せず、第四句「散」が押韻することになり、やはり一般の「水龍吟」とは異なる。

②、「東京夢華錄」(巻七)に「是月 季春、万花爛漫、牡丹・芍薬・棣棠・木香種種上市、売花者、以馬頭竹籠鋪排、歌叫之聲、清奇可聽。晴簾静院、曉幕高樓、宿酒未醒、好夢初覺、聞之莫不新愁易感、幽恨懸生。最一時之佳況」とあり、この種の花売りの光景を意識しているとすれば、「売花の声」は早朝から始まることになる。また花は盆栽の類であろう。

(一九九六年十二月十一日受理)